

【ポスターセッションの場合のみ記入 9pt 明朝・左端揃】

糸賀一雄研究3-近江学園を築いた3人の思想を通して考える知的障害者福祉

—糸賀一雄、池田太郎、田村一二—

○ 京都文教短期大学 氏名 石野美也子 (002485)

キーワード：糸賀一雄・近江学園・知的障害者

1. 研究目的

今年糸賀一雄生誕100年にあたり、近江学園が創設され68年がたつ。糸賀一雄が亡くなって44年がたち当時を知る人が少なくなる中で近江学園を創設した3人の考えを振り返ることで今日抱えている知的障害者の高齢化の課題や地域に生きるとはということを考えてみる。近江学園が創設され約70年がたとうとしている現代においても、なおその創設者の考えを求める研究が多くあるという点に、近江学園が如何に先駆的な施設であったか、また糸賀、池田、田村という3人の出会いがあつて今の日本の知的障害者福祉は大きく展開し、今なおその考えは障害者福祉の指針となるものであることを示している。

本発表では、その3人の知的障害者に対する考えを示す言葉を抜粋し、その障害者観を通して現在の知的障害者の課題から見えるものを考察する。

2. 研究の視点および方法

3人の実践はどのような思想の基に行われたのか著書を中心に研究し、糸賀一雄の講義ノート及びS施設における「お話を聞く会」における利用者とのやりとりを参考にして研究を進めた。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会の倫理規定に基づき、施設名や個人を特定できないよう配慮した。なお、近江学園については個人を特定する内容がないため、また、歴史を振り返る点においても施設名が必要であるため明らかにしている。知的障害(者)という用語については様々、議論のあるところではあるが本発表においては法律用語に従い、知的障害(者)という用語を用いる。

4. 研究結果

近江学園は1946年、滋賀県立近江学園として大津市南郷(1973年、石部町に移転)に建てられた。当初は戦災孤児、生活困窮児、知的障害児の3つに分かれ2部制で行われた。このことも、のちに糸賀の実践の中にノーマライゼーションの萌芽を見ることができきっかけとなったと考える。近江学園の初代園長は糸賀一雄であるが、先に滋賀県で実践をしていた池田太郎、田村一二が終戦に伴いそれぞれの園が閉鎖されることになり、新しく児童のための施設が必要だと糸賀一雄に相談し近江学園設立へと至った。児童のためと書いた

のは、このときすでに3人の頭には知的障害児だけでなく、親と死に別れたり、養育困難な児童もともに教育すべきであると、インテグレーションの考えがあったことが設立の趣旨をみてもわかる。戦後、社会福祉の先駆けとして新しい考え方で取り組まれたのが滋賀県立近江学園である。次に、糸賀、池田、田村の残した言葉を基に障害者観を考察する。

(1) 糸賀一雄—思想に裏付けられた実践者としてのまなざし

糸賀の実践には思想があると語られる。それは糸賀が京大の哲学科で学んだこと、若い日にキリスト教に入信し、京大では京都学派の影響を受けたことも大きな要因ではある。しかしそれだけではなく、偶然の出会いが必然へと導いていったと思われる。その一つは以前からの知り合いで糸賀が師と仰ぐ池田、田村との出会い、そこから生まれた近江学園への道のり。そこには先に述べた近江学園の設立過程においてインテグレーションを意識し、実践の中盤では近江学園の職員との記録のやりとりの中で「君と命について語り合いたいね」とあるように園生や職員とのふれあいの中で命を見つめ、晩年は講義ノートに書かれている「限りある命」というように心臓を患い、このままでは命に限りがあるという中での実践であった。「この子らを世の光に」は様々な命と向き合い、出した糸賀の障害者観といえる。

(2) 池田太郎—地域の中で生きるということを見つめた実践者としてのまなざし

池田太郎は昭和27年、近江学園から20名の園生をつれて信楽に設立された信楽学園に赴任。当初は身体障害者も一緒に生活し、知的障害者施設として独立したのは昭和35年である。その後も信楽青年寮を設立し、地域とともに成長する知的障害者を見守ってきた。その池田の臨終の時背広の内ポケットに持っていたメモに4つの願いが書いてあった。

① 働きたい②無用の存在でなく有用の存在で有ると思われたい。③皆と一緒に暮らしたい。④楽しく生きたい。地域で知的障害者のライフサイクルを見つめた池田の言葉は信楽青年寮の理念として今も引き継がれている。

(3) 田村一二—誰もが当たり前で生きることのできる社会を求めた実践者のまなざし

田村一二は、京都の滋野小学校出始めて知的障害児と出会い、石山学園に赴任したときはすでに障害児教育のエキスパートであった。その田村が近江学園から一幕寮(現・一麦)に移り、その間に多くの言葉を残している。その中でも滋野小学校時代に得た体験の中で考え、一生涯その考えを貫いた言葉が「差あって別なし」である。誰もが存在としては等しい価値があり、福祉とは上下の別のないものであるという考えである。田村はのちに、茗荷村構想を立て大萩茗荷村を作る。そこから田村は社会のどこにもそのような、誰もが当たり前に住める場所が必要だというメッセージを発した。

5. 考察： 利用者の方が「今は何とか働いているが働けなくなったらどうしよう」と不安を漏らされた。その不安は我々誰もが共通に持つもので、命と向き合い、その仕事に自分の存在意義を見だし、それが当たり前である生活をしてこられたからこそその不安ではないか。誰もが共通に持つ命を大切にできる社会こそ誰もが住みよい社会だということを抜きに知的障害者の、また、社会福祉の課題は解決できないという視点が必要である。